

調査

パナソニックが掃除機使用時のストレスに科学のメス

「掃除機の形状・構造の改良で、利用者のストレスをどれだけ軽減できるか」——パナソニック（本社・大阪府門真市。津賀一宏社長）

内のアプライアンス社と、マーケティング調査企業のセンタン（本



MC-JP800G（パナソニック）

社・千代田区。田中尊信社長）は、7月10日こんな一風変わった調査結果を発表した。

「嫌いな家事」として常に上位の「掃除」。しかも掃除機自体にも本体やアタッチメントが重い、という不満を消費者の多くが抱いているという。

これを踏まえ、掃除機のハンドル形状を長くすることで、体の近くで持ちやすくし、加えてホース位置を下げ手元への荷重を軽減すると共にアタッチメントも軽量化、掃除時に感じる「気持ちの変化」や「身体への負担の変化」を、脳波や心拍数の解析などで科学的に検証、「ビフォー&アフター」の差を明らかに。

その結果、キャニスター型掃除機のハンドル形状の変更とアタッチメント質量（ホース・延長管・ノズル）の軽量化で、ストレスの軽減と、使用感の向上が、そしてさらに腰曲げ角度検証でも、姿勢の改善による身体への負担も軽減する、という実証結果を確認したという。

比較検証で使用した製品は、パナソニック製紙パック式掃除機の

「MC-JP520G（ハンドル長約14cm／アタッチメント質量約1・6kg）」と、今年9月20日発売予定の新型「MC-JP800G（同約28cm／約1・3kg）」。

検証結果では、後者の方が掃除直後の脳を緊張緩和傾向に導き、同時に心拍の収束がより早くなる模様で、ストレス軽減も確認。

姿勢検証でも、腰の曲がり角度が約3・2度改善され、約3kg分の重量に相当する腰への負担が減ったという。

受賞

ヤマト運輸の「エコな物流」が物流環境保全活動賞を受賞

ヤマト運輸（本社・中央区。長尾裕社長）の「エコな物流」の取り組みが、第18回物流環境大賞（日本物流団体連合会主催）の「物流環境保全活動賞」を受賞した。

世界最先端の本格的かつ大規模なスマートシティとして、「Fujisawa サステイナブル・スマートタウン（Fujisawa SST。神奈川県藤沢市、世帯数約1000）」が注目されているが、同社は昨年

11月から、街中の宅配一括配送などの試みに参画している。

総合拠点となる「Next Delivery SQUARE」を構築し、他社の荷物を一旦ここで集約、街中での受配送は原則電動アシスト自転車や台車など「人力」で賄うなど、「エコ」を追求する試みを現在も継続している。

加えて、今年3月からは、配達予定時や不在連絡情報を、各家庭に設置されるスマートテレビに配信、ICT（情報通信技術）を駆使した「エコでスマート」も追求する。こうした同社の環境負荷低減へのチャレンジが、同賞受賞の決め手に。



ヤマト運輸が導入する電動アシスト自転車